

- 3) Seymour Gross and Rosalie Murphy (eds.), *The Blithedale Romance: The Authoritative Texts Contexts Criticism* (New York: Norton, 1978), p.55.
- 4) Lucy M. Freibert and Barbara A. White (eds.), *Hidden Hands* (New Jersey: Rutgers Univ. Press, 1985), p.356.
- 5) Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (New York: Stein and Day, 1966), p.24.
- 6) Lazer Ziff, "An Abyss of Inequality" in *Kate Chopin*, Harold Bloom (ed.) (New York: Chelsea House, 1987), p.23.
- 7) 発表当時の書評については、Norton 版テキスト中の "Contemporary Reviews" (pp.145-159) を参照。
- 8) Kenneth Eble, "A Forgotten Novel" in Bloom (ed.), p.154.
- 9) Willa Cather, "From the Pittsburgh Leader" in Culley (ed.), p.154.
- 10) Margaret Culley (ed.), *The Awakening: The Authoritative Text Contexts Criticism* (New York: Norton), p.3. 以後、*The Awakening* からの引用は全てこの版により、カッコ内にページ数のみ記す。
- 11) Barbara C. Ewell, *Kate Chopin* (New York: Ungar, 1986), pp.144-5.
- 12) George Arms, "Contrasting Forces in the Novel" in Culley (ed.), p.178.
- 13) Mary L. Shaffter, "Creole Women" in Culley (ed.), pp.120-1.
- 14) Wendy Martin, "Introduction" to *New Essays on The Awakening*, Wendy Martin (ed.) (New York: Cambridge Univ. Press, 1988), p.15.
- 15) Culley, p.118.
- 16) Martin, p.24.
- 17) Per Seyersted (ed.), *The Complete Works of Kate Chopin* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1969), p.433.
- 18) Carson McCullers, *The Member of the Wedding* (Harmondsworth: Penguin, 1962), p.141 の F. Jasmine と Berenice との対話の場面をさして、Barbara A. White は、F. Jasmine が共感を寄せる黒人 Honey Brown を、F. Jasmine の "double" と見ている。Barbara A. White, *Growing up Female* (Westport: Greenwood Press, 1985), p.98 を参照。
- 19) Lawrence Thornton, "The Awakening: A Political Romance", *American Literature*, 52 (March, 1980), 50.
- 20) Susan J. Rosowski, "The Novel of Awakening" in Bloom (ed.), p.47.
- 21) Sandra M. Gilbert, "The Second Coming of Aphrodite" in Bloom (ed.), p.104.
- 22) Rosowski, p.47.
- 23) George M. Spangler, "The Ending of the Novel" in Culley (ed.), p.188.
- 24) Elaine Showalter, "Tradition and the Female Talent: *The Awakening* as a Solitary Book" in Martin (ed.), pp.52-3.
- 25) Per Seyersted, *Kate Chopin: A Critical Biography* (Baton Rouge: Louisiana State Univ. Press, 1969), p.40.

産んだ時の強い喜びを次のように述べている。

The sensation with which I touched my lips and my finger tips to his soft flesh only comes once to a mother. It must be the pure animal sensation; nothing spiritual could be so real —so poignant.²⁵⁾

そのような Chopin が子供を束縛の一つと見る女性 Edna を描かずにいられなかったことこそ、当時の女性の状況をよく表わしている。

最後に、20世紀アメリカ文学のノーベル賞受賞作家たち William Faulkner (1897–1962), Ernest Hemingway (1899–1961), John Steinbeck (1902–68) の描く女性たちをそれぞれ見てみよう。Faulkner の描く肯定的な女性 *The Sound and the Fury* (1929) の Dilsey は耐えしのぶ年老いた黒人女性である。Hemingway の *A Farewell to Arms* (1929) の Catherine は、戦場での理想的な恋人のままお産で死んでいく。Steinbeck の *The Grapes of Wrath* (1939) の Joad 一家の母親 Ma は、苦難にあいながらも前進していく一家の生命力を体現している人物として描かれているが、役割を果たす呼び名 Ma だけで、固有名詞は与えられていない。一度は埋もれた作品となりながら、1960年代に入って再評価され始めた Chopin の作品 *The Awakening* は、19世紀末の女性が自らの姿を描いた作品として、やはりアメリカ文学史上で、重要な役割を持つと言える。

注

- 1) Margaret Culley, "The Context of *The Awakening*" in *The Awakening: The Authoritative Text Contexts Criticism*, Margaret Culley (ed.) (New York: Norton, 1976), p.117.
- 2) 現在入手できる Chopin の作品集のテキストとしては、Norton 版テキストの他に、Per Seyersted 編の *The Complete Works of Kate Chopin* (Louisiana State Univ. Press, 1969) をはじめとして、*The Awakening and Selected Stories* (Penguin, 1984), *The Awakening and Selected Stories of Kate Chopin* (Signet, 1976), *The Awakening and Selected Short Stories by Kate Chopin* (Bantam, 1981), *The Awakening and Selected Stories* (Modern Library, 1982) などがある。全集以外はいずれも比較的入手しやすいペーパー・バックである。最近のアメリカ文学史では、Emory Elliott et al. (eds.), *Columbia Literary History of the United States* (New York: Columbia Univ. Press, 1988) 中に、Chopin についての記述が10ページ余りある。Boris Ford (ed.), *The New Pelican Guide to English Literature 9: American Literature* (London: Pelican, 1988) には "Kate Chopin and Sarah Orne Jewett" という一項目がある。

るが、妻を扱うには「権威と強制が必要だ」(71)とする Edna の父親、作品冒頭の籠の中でやかましく啼き続けるオウムに対応するかのような鎖につながれて吠える犬の姿は、海へ入っていかうとする今でさえ、彼女の意識は支配する者と、支配され束縛されている者とでなる社会から逃れられないことを暗示している。最後のみつばちと花については、Showalter は「エドナの最後の記憶は子供時代の自由から女性に課せられた制限への目覚めの記憶であった」とした上で、「女性花で男性はみつばちである。花はよい匂いを出し、働き手のはちをひきつけるのだ」という19世紀の女権運動家 Margaret Fuller の文を紹介している²⁴⁾。Showalter の論を借りれば、このみつばちと花も、男性と女性に課せられた役割をそれぞれ表わしており、Edna の父親や犬の姿と同じ社会の一要素と考えられる。主にこの三つの理由から、結末は Edna の敗北を示しており、作者もかなり意識的にその敗北を書き込んでいると思われるのである。

基本的には、この作品は Chopin の代表的な短篇作品の “The Story of an Hour” や “A Pair of Silk Stockings” と同じく、普通の主婦が何かをきっかけとしてつかの間の美しい夢を見て、結局は挫折するという話に似ている。前者では、夫の事故死の知らせを受けて、これからの心身ともに自由な生活を夢みた人妻が、折しも無事に戻ってきた夫の姿を見て驚きのあまり心臓が止まってしまう。後者では苦しい生活の中で臨時収入15ドルを手にした主婦が、必要な日用品を買うつもりで出掛けた店で、ふと取りあげた絹靴下の手触りに魅せられ、絹靴下を買い、雑誌を買い、レストランで食事をし、劇場に入り、気がついたら、15ドルと共に夢のように楽しかったひと時が終わっている。いずれも、日頃、抑えられていた感情が一瞬は実現するものの、肉体的な死やお金という制約にうち負かされる。しかし、結局は実現しないからこそ、主人公たちの見る夢の美しさ、解放感は読者に強い印象を与える。

The Awakening では、ニュー・オリンズという社会規範の強い場を背景として、作者は一人の平凡な人妻を主人公に、彼女を見る夢を描きだす。方向のわからぬままに、一步踏みだそうとする彼女の行方は当然のことながら、敗北へと向かっている。が、Faulkner の *Light in August* (1932) において、人は白人でなければ黒人だとみなす二律背反の考えの浸透した南部社会で、そのどちらでもない Joe Christmas の姿が社会への強烈な告発となっているように、規範のはっきりした社会やそれぞれの役割を果たすことに満足した類型的登場人物の中で、妻や母親という役割を離れた時の自分が何者かを考えていく Edna の姿は鋭い社会批判ともなっている。作者自身は、1870年の結婚から1882年の夫との死別までの13年間に6人の子供をもうけ、最初の息子 Jean を

果てのない草原を横ぎろうといつまでも歩きつづけた時のように海へと入っていく。一方、この時の彼女は完全に孤独で、泳ぐにつれて去年はじめて一人で泳いだ時の古い恐怖がよみがえる。子供たちは自分の命の一部だけれども「私の体と魂を所有できると考える必要はない。」(114)と、再び子供たちや夫のことを考え、Mademoiselle Reisz, Robert, 医者たちの言葉が脳裏に浮かぶ。最後の彼女の記憶は少女時代のひとこまで、父と姉 Margaret の声、鎖につながれた犬の鳴声、ポーチを歩く将校の拍車の音が聞こえる。最後の一文は次の通りである。「みつばちのうなりが聞こえナデシコの麝香のような匂いが空気を満たしていた。」(114)

このような結末についてはいくつかの解釈がある。「結婚や母性という虚構に背を向けて死の世界ではなく生命の世界すなわち海へ入るのだ」²¹⁾という肯定的な見方、「自殺は最後の逃避の試みだ」²²⁾という否定的な見方、「19世紀末の道徳的な読者を満足させるためにいわゆる悪い女に罰を与えた」²³⁾という見方などである。先程紹介した最後の場面ばかりでなく、この作品には Edna の足どりについては肯定的とも否定的とも受け取れる文章が多いのが、このように結末の解釈がわかれる一因となっていると思われる。Edna の立場に立って主観的に考えれば、彼女の自殺は勝利であろう。子供たちのためにさえ犠牲にできない「自分自身」や「本質的なもの」をとともあれ最後まで守りとおすための自殺なのだから。また、客観的に考えれば、死ぬことは自分の一切の可能性の否定だから、彼女の自殺は敗北と言えよう。

様々な解釈の余地があるが、作品全体を考えれば結末はやはり Edna の敗北であったと考えられる。第一に、前半では Edna の「目覚め」は妻や母親ではない自分自身の可能性へと向けられている。彼女が身を置く社会から見ればそれは夢への目覚めでもあった。後半、特に最後に向かうにつれて彼女が目覚めていくのは、社会や自然の制約とその制約を否定することのできない自分であった。社会規範に対立するはずの行動は衝突する相手が見えなかった。産んだ者としての子供たちへの責任だけは彼女の「目覚め」とは別にどうしても逃れられない。この発見のあとに続く自殺なのだから、話全体の流れを考えれば、結末は追い詰められての死と受け取らざるを得ない。第二に、夫や子供との関係を問題にするならば、その問題の解決は社会という人間の住む場を離れてはあり得ない。避暑地という非日常的な場で生じた「目覚め」の可能性は、日常生活の中で確かめられてこそ、その「目覚め」が本物だったかどうか明らかにされる。人間関係を問題とする限り、海という社会の外に広がる空間でいくら自分一人の感覚が解放されたとしても、それは本質的な解決とならないのである。第三に、Edna の最後の記憶は少女時代ののどかな情景とも受け取られ

ようとした彼女の試みは失敗した。紳士ならば人妻と本気の恋愛をしてはいけない、という社会の決まりを Robert は守らずにはいられないこと、夏以来彼女は変わったのに Robert は変わらなかったこと、恋愛は一人ではできないこと、恋愛はその結果として新しい命を生じさせること、三月のはじめには夫が仕事から帰ってくること、などこれまでもおざりにしていた現実と直面した彼女はこの時、おそらく現実「目覚め」ていくのである。

以上のように、Edna は作品前半で夢に目覚めたあとで、後半では話が終わりに近づくにつれて、今度は現実「目覚め」ていく。勿論、Mr. Pontellier の要求するような結婚生活の現実へと後もどりするわけではない。具体的には、これまで述べてきたように、Alcée Arobin との関係を通じて、心とは別に体は感じるという自分の中の官能を知る。周囲の社会の中での自分の位置と、そこから逃れようとする試みも結局は徒労に終わると経験する。出産場面の目撃を通じて、自分が産んだ子供達だけは無視できないと発見する。Robert との別離を通じて、彼との恋愛も一種の幻想にすぎなかったと理解する。これらは、夫の言うような現実からは遠ざかる夢に目覚めたからこそ、その夢を手がかりにして目覚めることのできた現実だが、この後 Edna はどこに行くのだろうか。次のIV章では39章を中心に、彼女の自殺とこの作品の意義について考えてみたい。

IV

Robert の去った翌朝 Edna はグランド・アイルに姿を現わす。夏のあいだは多くの避暑客で活気づいていた避暑地も季節はずれの今となっては、夏のざわめきを知っている者には特に、現在の侘しさが強く感じられるはずである。ちょうど居合わせた Robert の弟 Victor に向かって「何もかもなんてもの寂しいのでしょう」(112) と、Edna は言う。昨夜のうちに何もかも考えつくした彼女は特に何を考えるでもなく、海辺へと向かう。昨夜彼女の考えたこととは、今後もつき合う相手を変えていっても彼女にはなんの変わりもないこと、そばにいてほしいのは Robert しかいないが、その Robert への思いさえいつかは消えるであろうこと、と一種の無常の姿である。子供達のこと「自分をうち負かし残りの生涯、自分を魂の奴隷へと引きずりこむ敵」(113) のように思える。

以後の Edna の描写には解放感と絶望感の両方が含まれている。古い水着を脱ぎすてて裸で海辺に立ちながら、彼女は「知ることのなかった世界に眼を開こうとしている生まれたばかりの生きもの」(113) のように感じ、少女時代に

Perhaps—no, I am not going. I'm not going to be forced into doing things. I don't want to go abroad. I want to be let alone. *Nobody has any right—except children, perhaps—and even then, it seems to me—or it did seem—* (109) [Italics mine]

一人にしておいてもらいたい、子供以外には誰にも自分に対する権利がない、と言いかけて口ごもるのは、出産場面を見る以前と今とでは彼女の考えが違って来たことを示唆している。つまり、自分は自分一人のものではなく、自分が産んだ子供への責任だけは逃れようがないことに、この時彼女は気づくのである。続いて、Edna の問題を Alcée Arobin との恋愛としか考えられない医者とEdna との対話は次のようにすれ違う。

“The trouble is,” sighed the Doctor, grasping her meaning intuitively, “that youth is given up to *illusions*. It seems to be a provision of Nature; a decoy to secure mothers for the race. And Nature takes no account of moral consequences, of arbitrary conditions which we create, and which we feel obliged to maintain at any cost.”

“Yes,” she said. “The years that are gone seem like *dreams*—if one might go on sleeping and dreaming—but to wake up and find—oh! well! *perhaps it is better to wake up after all, even to suffer, rather than to remain a dupe to illusions all one's life.*” (109–110) [Italics mine]

医者は「幻想」(“illusions”)を婚姻外の恋愛のこととし、それを道徳的な結果を無視してでも人間に子供をつくらせていく自然の配慮とみなす。一見、医者の言葉を受けると見えながら、Edna の言う「夢」(“dreams”)は医者の「幻想」とは一致しない。「困ったことがあれば相談するように」と助けの手をさし伸べる医者に、「自分のやり方以外はほしくない」(110)と答え、「すべては明日考えよう」(110)とするEdnaは、ここではまだRobertとの恋愛の成就という夢を予期しているからだ。彼女にとっては妻としてのこれまでの生活が「夢」のようで、生涯結婚生活という幻想にとらわれているよりも、たとえ苦しくとも「目覚め」たほうがいいのである。

しかし、帰宅すると「さようなら——愛しているから」という書き置きが残されているだけで、Robertは姿を消していた。朝まで眠らず、Ednaが何を考えたかは作者は述べていない。Robertとの恋愛をきっかけに、不可能を夢見

圀の人々との関係を変えたくても、夫と子供が不在という人間関係の一種の真空状態のなかでは、彼女になすすべはなく、気持ちばかりが走っていくしかないのである。

主観的には自己実現へと向かいながら、客観的な社会でそれを実現する手段のないままに、現実感を失っていく Edna の姿は、メキシコから帰ってきた Robert との再会の場面にも示されている。ここで二人はようやく互いの愛情を確認し合う。Edna は人妻で自由ではないのだから、これまで気持ちを抑えていたのだ、と告白する Robert に彼女は言う。「私はもう夫が勝手に処理できる財産ではないのだから、自分で選んだところに身を置くのだ」(106-7)と。もはや人の持ち物ではなく、一人の人間であるという誇らしげなこの宣言はニュー・オリンズに戻ってからの彼女の成長を確かに示している。しかし、この時出産の手伝いに来てくれという Madame Ratignolle からの伝言が届き、二人の対話は中断する。手伝いをすませて帰ってくるまで待っていてくれるように、と頼みながら、Edna は語りかける。

I love you,only you; no one but you. It was you who awoke me last summer out of a life-long, stupid dream.... *We shall be everything to each other. Nothing else in the world is of any consequence.* (107) [Italics mine]

長い夢すなわち結婚生活から目覚めたのは Robert のおかげだとしながらも、この引用文の後半では Edna は新たに不可能な夢を見ている。「互いにすべてになろう」という言葉は先程の「自分はもう夫の財産ではない」という発言とも矛盾している。互いにすべてになるとは、互いを完全に所有しあうことだからである。しかし、矛盾したふたつのことを願いながら、ここの彼女はそれに気づいてさえいない。

このあとに続く Madame Ratignolle の出産場面の目撃と、Robert との別れはそれぞれ、このような Edna を現実面に直面させる。これまでの彼女が夢に「目覚め」ていたのなら、以後の彼女は現実に「目覚め」ていく。まず、彼女は Madame Ratignolle の産みの苦しみに強いショックを受ける。「心の中で苦しみながら、自然のやり方に燃えるような反抗を感じながら、彼女は苦しみの場면을眺めていた。」(109) 別れぎわに、Alcée Arobin との交際を心配する Madame Ratignolle から「子供たちのことを考えて、*♪*」(109)と言われた Edna は子供達のことを考えはじめる。帰途、Dr. Mandelet より、夫が仕事から帰ってきたら一緒に外国へ行くのか、と聞かれて、彼女は次のように答える。

女性はその才能を抑えられていることを暗示している。「知っている決まりによれば、自分はとても悪い女。けれども何故かそうだとはい納得できない。よく考えてみなければ。」(82)と Mademoiselle Reisz に語る Edna の変化は、作者によって次のように肯定的に説明される。「社会の尺度で落ちた分だけ、精神的に上昇していく感じがした。自分の眼でものを見はじめた。人生の底流を理解しはじめた。」(93) Edna とボヴァリー夫人との違いは「クリオール社会の中での自分の立場に関する政治的な危機に Edna は気づいている」¹⁹⁾ ことだと Lawrence Thornton は言う。最初に紹介した Cather より、Thornton の見方のほうが深い。前半に比べて、ニュー・オリンズに戻ってからの Edna は、少なくとも自分の社会における立場を理解しかけているからである。

しかし、先に見たように、彼女の反抗は結局有効ではない。妻としての役割を問題にするならば、夫との関係をどう変えていくかが大切になるが、夫をはじめとする周囲の人々との葛藤を Edna は経験しない。女性が主人公の場合、「目覚め」の物語は限界への目覚めとなるとしたうえで、Susan J. Rosowski は「Edna の示す受動的な態度の中心には、客観的な世界から逃れようとする彼女の試みがある。」²⁰⁾ と説明する。Rosowski は、同時に、Edna の自殺を逃避の最後の試みとみなしている。けれども、Edna が夫などとの現実の葛藤をほとんど経験しないのは、彼女の責任だけではない。近頃、妻の態度がおかしい、と Mr. Pontellier に相談された Dr. Mandelet は、「女性はすべておなじではない」(65) と、Edna の状態に関して一面的な見方はしていない。が、医者 of Mr. Pontellier への忠告は次のとおりである。

Most women are moody and whimsical. This is some passing whim of your wife, due to some cause or causes which you and I needn't try to fathom. *But it will pass happily over, especially if you let her alone.* (66) [Italics mine]

登場人物のなかでは、Edna に対して比較的に理解者に見えるこの医者さえ、彼女の変化を根本的なものだとは思わず、「一人にしておけば、この状態は無事にすぎるだろう」と楽観的な見方をしている。その結果、Mr. Pontellier は商用でニュー・ヨークへ出張し、Edna は一人にされる。また、夫が出発したあとで二人の子供を手放すのは、Edna が積極的にしたことではなく、父親の留守中に孫達の世話がよろこぶようになるのを心配した Old Madame Pontellier が、孫達を引取りにやってきたのである。更に、自己表現と生計をたてるための手段でもある絵を描く仕事は、一人でいる時間をどうしても必要とする。周

ないと言えよう。社会の力にからめとられて、逃れる術はわからないのだから。

もっとも、はっきりとは説明されていないが、Edna は心の底では社会における自分の位置を感じとってはいると考えられる箇所がある。妻としての義務 (“her duties as a wife”) を完全に怠っていると夫になじられたあとで、彼女は Lebrun 家を訪ねる。

Their home from the outside looked like a prison, with iron bars before the door and lower windows.... A black woman, wiping her hands upon her apron, was close at his heels...., the woman—plainly an anomaly—claiming the right to be allowed to perform her duties, one of which was to answer the bell. (59) [Italics mine]

牢獄のような家の中で、訪問客に答えるのは自分の義務 (“her duties”) だと主張する黒人女の姿と、家で妻としての義務を果たすことを求められている自分とが、この時、たとえ無意識にしても Edna の中で重ね合わされたに違いない。Chopin の短篇 “Athénaïse” では結婚生活を嫌って逃げだした妻を追う夫に、逃亡奴隷を追う父親についての幼い日の記憶がよみがえる。夫にとってその記憶はなぜか “hideous” と感じられる。言うまでもなく、逃亡奴隷と妻とがここでは同じ立場の者として結びつけられているのだ¹⁷⁾。時代はくだって南部の作家 Carson McCullers (1917–67) の *The Member of the Wedding* (1946) にも、主人公の少女が、少女であるために生れつき加えられている制限のために、同じように生き方を制限されている黒人に親近感を持つ箇所が出てくる¹⁸⁾。

もうひとつ、Edna が社会における自分の位置を無意識にせよ感じとっているとされる例をあげよう。Highcamp 家に食事に招かれ、夫人の夫への心遣いを見、Miss Highcamp のピアノを聴いた夜、彼女は奇妙な夢を見る。

When the maid awoke her in the morning Edna was dreaming of Mr. Highcamp playing the piano at the entrance of a music store on Canal Street, while his wife was saying to Alcée Arobin, as they boarded an Esplanade Street car:

“What a pity that so much talent has been neglected! But I must go.” (75)

夫のほうがピアノを弾き、「これほどの才能が無視されるのは残念だ」と言いながら妻が電車に乗りこむという夢は、現実の男女の立場を逆転させてみて、

のである。

Alcée Arobin との関係についても同じようなことが言える。彼とのキスは、Edna の天性がはじめて本当に反応したものだった。そのあとで彼女はひとつの認識に至る。

Above all, there was understanding. *She felt as if a mist had been lifted from her eyes, enabling her to look upon and comprehend the significance of life, that monster made up of beauty and brutality.*

But among the conflicting sensations which assailed her, there was neither shame nor remorse. (83) [Italics mine]

この作品の最初の方では、彼女の、表現できない抑圧感は「影や霧のよう」(8)と表現されていた。この引用文では、霧が取りのぞかれ、彼女は「美しさと獣性とでなりたつ怪物のような人生の意味を理解する」。今でも彼女が恋しているのは、ここには居ない Robert なのに、愛してもいない Alcée Arobin によって官能の満足感が得られる。心は感じていなくとも、体は感じてしまう、という認識は彼女にとって不思議だっただろうが、そのように感じる自分を彼女は決して恥じもしないし、後悔もしていない。官能や肉体そのものの肯定は、確かに彼女の「目覚め」のひとつであったと言えよう。Wendy Martin は「小説が明らかにするように、情熱は確立された社会構造を不安定にする」¹⁶⁾と述べる。もし、ここでの Edna の目覚めが社会構造と対立するものならば、Martin の言うことは正しい。が、Edna と Alcée Arobin との交際は夫の留守中、人目につかないように進展していき、ひいては人に知られないところでは婚姻外の恋愛が実行されているという、彼らの社会ではありふれた出来事のひとつにしかすぎない。社会慣習と対立することがなく、むしろその社会に組み込まれた行動である、という意味では別居の場合と同じく、一見決定的に見える Alcée Arobin との肉体関係でも、むしろ Edna の社会に対する無力さが強調されていると考えられる。

絨毬の上に投げ捨てた結婚指輪を踏みにじろうとしても、小さな靴のかかとでは痕をつけることも出来ないと気づいて、Edna は指輪をはめなおす。その小さな行為が一人の時に行なわれて彼女だけしか知らないように、彼女にとっては自己実現への大事な試みも周囲からは知られることがなく、試みが失敗したことさえ、世間の目からはないに等しい。理由もわからないのに、幸せになったり、不幸せになったり、と感情が不安定になり、「人生は混沌であり、人は避けがたい死へと向かう虫けら」(58)に思え、厭世的になっていくのも無理は

の目覚めの行方を考えてみたい。

Edna の足取りは次の通りである。火曜日の訪問日を無視して外出したための夫との諍い (51-2), 結婚指輪を絨毯に投げつけ踏みにじる (53), Madame Ratignolle を訪問 (55), 11月半ば Lebrun 家, Mademoiselle Reisz を訪問 (61), Edna の父の訪問 (67), 父と行った競馬場で Alcée Arobin らと会ったことが食卓の話題にのぼる (69), 夫がニューヨークへ出発したあとで子供たちを祖母に預けて, 一人になる (72), Alcée Arobin の厚かましい目つきが Edna の目覚めつつある官能を引きつける (76), Alcée Arobin との初めてのキス (83), 引っ越しの日に晩餐会を開く, (29歳の誕生日) (85-90), 夫の家を出て小さな家へ移る (91), Mademoiselle Reisz の家で Robert に再会 (96), 郊外の小さな庭で再び Robert に再会, 互いの気持ちをうちあけ合う (104-7)。このあと, Madame Ratignolle の出産の手伝い, 自殺という結末を迎えるわけだが, 107ページまでに見る限りでは, 妻という役割への反発から具体的な行動の模索, その実行, と彼女の足取りは一貫して自己実現に向かっているように見える。しかし, 果たしてそうであろうか。

妻の役割放棄の試みの内, もっともはっきりしているのは Edna が夫の家を出て, 自分だけの小さな家を持ったことである。以前, Robert から「才能がある」(13)と言われた絵の腕をニュー・オリンズに戻ってからも磨きつづけた彼女のスケッチが売れはじめ, 母の遺産の地所からの収入と競馬で勝ったお金を合わせて, 経済的に一人で暮らしていく見通しを彼女は立てる。「今の家は自分のもの, つまり家庭という感じがしなかった。.... 家も家を維持するお金も私のものではない。」(79)と Mademoiselle Reisz に語る Edna は, 精神的に夫から独立するためには経済的な独立が必要だとわかっていて, それだけの金銭的能力も持っている。「既婚女性のほとんどは夫の財産で, 結婚したあとの妻の蓄財は夫の財産になる」¹⁵⁾ 土地柄や自分の持ち物を高く評価する夫に対して, Edna のとる行動は反抗的である。周囲の人々から孤立したピアニスト Mademoiselle Reisz との交際, Ratignolle 夫妻の仲のよさに対する嫌悪感, 「結婚式はこの世で最も悲しい光景だ」と公言するなど, 彼女の周囲に対する姿勢は定まっていく。社会慣習すなわち現実への公然とした反抗である。

ところが, その反抗の頂点のひとつである別居は, 夫によって無意味なものとされる。反対したにもかかわらず, 妻が家出をしたと知って, 出張中の Mr. Pontellier は体面を守るためにさっそく新聞に通知を載せる。屋敷を改装するために一時妻を他所に住まわせる, と。屋敷の改装が始められ, Edna の反抗は結局夫の手のうちを動いたにすぎなかったことが示される。自力で家を借りたことも, 結局世間の眼には屋敷の改装中の一時的な引っ越しとしか見えない

クリオール女性は健康を害することは極力避けるのだ、という作者の説明には皮肉な響きがある。彼女たちの美しさが黒人の労働力の上に成り立っているのならば、それは本当の美しさとは言えない。また、避暑客たちの週末のパーティに出されるアイスクリームは、二人の黒人女によって作られる。クリオール女性の健康の裏にミシンのペダルを動かす黒人の少女がいるように、避暑客たちの楽しみの裏には黒人の働きがあるのである。

このように見れば、さりげない文章の中に作者は Edna を囲む社会の有様をはっきりと書き込んでいることがわかる。それは、一言でいえば「人種と性別によるダブル・スタンダード」¹⁴⁾を持つ社会である。男女と白人・黒人とを二分し、それぞれの役割が固定された社会である。話の展開のなかで、そのような社会に対する作者の態度は批判的である。地域社会への目という意味では、この作品は後の Sinclair Lewis, Sherwood Anderson, William Faulkner などの作品にも通じる面を持っている。けれども、彼らの作品の登場人物たちがまわりの社会に対して、批判的であったり、反抗したりするのに対して、Edna は初めて接するクリオールたちの一見開放的な雰囲気の影響を受けるばかりで、彼らの社会の構造を認識することはないのである。夫との関係の息苦しさ、Robert へ次第にひかれていく気持ち、と彼女はその折々の感情に動かされていく。社会に対する態度についても、作者と Edna との距離は大きく、Edna の「目覚め」が社会に向けられたものでないことがここまででは明らかに示されている。

以上の通り、Edna の「目覚め」とは自分が感覚、恋愛感情、性的欲望、能力、を内に持った一人の人間であることに気づいたということであり、その認識は彼女と夫や Madame Ratignolle とのやりとりで見られるように、周囲の社会の考え方とは真っ向うから対立する程の意義を持つ。しかし、彼女の「目覚め」は同時に作者によってその限界が繰り返し強調されており、様々な問題を含んでいる。夏の避暑地という非日常的な場で生じた「目覚め」は、ニュー・オリンズという日常の場に Edna が戻ってからは、どのようなになっていくのだろうか。「目覚め」の行方を以下、Ⅲ章で扱うことにする。

Ⅲ

17章以降では、16章までに見られた Edna の変化の内、妻の役割への不満感と官能の目覚めとが発展していく。前者はそれまでは受け入れていた妻としての役割の放棄へ、後者は Alcée Arobin との肉体関係へと、それぞれ行動に移される。主にそのふたつの行動の意義を論じてから、作品後半における Edna

ようであるし、後者は妻の義務を怠っていると、Edna を非難してばかりいる。彼にとっては、夫の役割は外で家族のために働くことで、その間家庭を守るのは妻の役割なのだ。

夫婦関係が重視される一方、クリオールをあいだでは軽い恋愛遊びが行なわれる。Robert は11年前の15歳の時からグランド・アイルで過ごす夏にはいつも「美しい女性の献身的な付き添い」(12)を演じてきた。そのような彼がこの夏には Edna に本気になりかけている様子を見て、Madame Ratignolle は忠告する。「結婚した女性に対して本気だと思わせようとするならば、あなたは紳士ではない」(21)のだと。更に続けて二人は Alcée Arobin と領事の妻、フランス・オペラのテナー歌手、その他の噂話をする。ここで示されているのは、夫婦関係を絶対としながらも、遊びの恋愛ならば容認し、人に知られないところでは婚姻外の恋愛が実行されている、本音と建前との二面性を持つ社会である。噂話に夢中になる余り、Robert と Madame Ratignolle は、Edna は恋愛に本気になるかもしれないことを忘れてしまう。しかし、Edna にとっては遊びの恋愛はありえない。よそ者の彼女には本音と建前との区別はつけられないのである。

夫と妻の役割、結婚と恋愛とが二分されているように、男性と女性の活動領域も二分されているらしいことが、Mr. Pontellier を通して示される。妻と子が避暑をしている島に週末だけやって来る彼は、妻たちのたち入れない世界を持っている。楽しげに語りあう妻と Robert の傍らで彼は Klein's Hotel へ行き、ビリヤードをすることを考えている。(5) 仲買業の仕事で忙しい自分には、家で子供たちの面倒を見るわけにはいかないのだ、と妻に言う。(7) 週末が終わりニュー・オリンズの仕事の間へ帰るのを喜ぶ。(9) 夏の避暑中の行動とは言え、街にいる時も彼の活動領域は妻たちと重ならないことが多いのであろう。

更に、ごく簡単にであるが、白人と黒人との役割の区別も示されている。Edna の子供たちの乳母は「四分の一黒人」(“quadroon”)(4)である。Edna の滞在する宿の主人 Madame Lebrun は、自分の使うミシンのペダルを床に座った黒人の少女に動かさせる。

Madame Lebrun was busily engaged at the sewing-machine. A little black girl sat on the floor, and with her hands worked the treadle of the machine. The Creole woman does not take any chances which may be avoided of imperiling her health. (22)

っているうちに、彼女は夢から醒めていく人のように感じる。

Edna began to feel like one who *awakens* gradually out of a dream, a delicious, grotesque, impossible dream, to feel again the realities pressing into her soul.... She slept but a few hours. They were troubled and feverish hours, disturbed with dreams that were intangible, that eluded her, leaving only an impression upon *her half-awakened senses of something unattainable*. (32-33) [Italics mine]

ここでの夢とは現実からの逸脱であり、Edna の意識はまだ結婚生活という現実のがわにあるものの、「目覚め」という言葉の意味が引用文の1行目と5行目では異なることに注意しておこう。1行目の「目覚め」は文字通り「夢見る状態」からの目覚めだが、5行目の「目覚め」は彼女の中で何かが目覚めるという意味である。何かが目覚めた結果として、現実から遠ざかり夢を見はじめる。誤解をまねく言い方をすれば、Edna はこの夏、夢に目覚めたのだ。そして、彼女の立場から見れば、「眠った状態」とはこれまで生活してきた現実をさすのだ。そのような「目覚め」が本当のものかという問題は勿論、彼女を見る人の視点によって違ってくる。夫の Mr. Pontellier のがわから見れば Edna が結婚生活という現実から遠ざかっていくのは「眠った状態」になることであり、16章までで彼女がしばしば眠るのは、現実のがわから見ての彼女の「目覚め」の有様と言えよう。

それでは現実のがわ、すなわち、作品の背景はどのように描かれ、その背景に対する Edna の反応はどのようなものだろうか。主人公の内面の変化を語ると同時に、作者は Edna の生きる社会や時代をも書きこんで、話を展開していく。背景をなすクリオール社会には、それまでの Edna は実は完全になじんだことがなかった。ミシシッピ州にプランテーションを所有していた父親を持ち、少女時代をケンタッキーで過ごした彼女は、「アメリカの女性」(6)と紹介されている。避暑客のクリオール達が互いに知り合い、「ひとつの大家族」(11)のようであるのに対して、彼女はその社会に対するよそ者である。その彼女の目を通して、クリオール社会の特質が明らかにされていく。Mary L. Shaffter の説明によれば、クリオールの特徴は保守的なことで、クリ奥ールの女性には妻として最高で、彼女達の権利とは投票することではなく、愛し、愛されることである¹³⁾。そのような女性の典型として Madame Ratignolle が登場し、それに対応する男性として Mr. Pontellier が登場する。両者とも必ずしも好意的には描かれていない。前者は「昔のロマンスのヒロイン」(10)の

混乱したものだと思っつけ加えるのは、執筆時に40代後半で人生経験をつんだ作者と28歳の主人公との距離でもあろうが、作者自身が主人公の混乱を認め、当然とするならば読者には主人公の混乱ぶりは強く印象づけられる。

このように作者が Edna より一段上にいて、彼女の限界に触れるという書き方は、Edna がその夏はじめて自分の力で海へ泳ぎだすという有名な場面にも使われている。Mademoiselle Reisz の弾くピアノを聞いたあとで、一座の人々が浜辺へでたとき、海の波は「ゆるやかに動く白い蛇のように」(28) くなっている。その夜はじめて一人で泳げた Edna の自分の能力に対する喜びと、海の広大さへの恐れとがこの場面では同時に述べられる。

A feeling of exultation overtook her, as if some power of significant import had been given her soul. She grew daring and reckless, overestimating her strength. She wanted to swim far out, where no woman had swum before. (28) [Italics mine]

ここでも自分の能力を発見した Edna の喜びには、“overestimating”という言葉がかぶせられ、その能力への疑わしさ、本人は知らないが作者にはわかっているという態度が示されている。このような書き方は Edna の「目覚め」の限界をあらかじめ設定していることになるのではないか。

また、「目覚め」が「眠った状態」から醒めることならば、「眠った状態」が何をさすのかが明らかにされていなければならない。一般的に言うならば、「眠った状態」とは「夢みる状態」、「現実から離れた状態」とも言いかえられる。ところが、Edna の場合には逆に、彼女は目覚めるにつれて現実から遠ざかっていくとも言えるのだ。結婚前に彼女の恋した相手は「ナポレオンのような眼と額に垂れた黒い巻き毛」(19)の将校、婚約中の若い紳士、偉大な悲劇役者、と皆ロマンティックな雰囲気を持っていた。熱心に求愛されて今の夫と結婚する時、彼女は「ロマンスと夢の世界に永遠の扉を閉ざし、現実の世界で、献身的な妻としての役割をある威厳をもって演じよう」(19)と考えた。自分がロマンティックな気質であることを悟り、結婚生活という現実を一度は選びとったのである。しかし、この夏の Edna はまるで少女時代に戻ったかのように、現実から離れていく。はじめて自力で泳いだ夜、「今夜は夢のなかの夜のように」と語る彼女に、仲間にする人間をさがしにやって来た妖精は今夜 Mrs. Pontellier を見つけ、もはや彼女をその魔力から完全に解放することはないだろう、と Robert は物語る。夢見心地となって帰宅した Edna は、夫の勧めにさからい、家の中に入ろうとしない。しかし、外のハンモックに横たわ

もっとも、この言葉を聞いた mother-woman の権化 Madame Ratignolle には、Edna の言うことが理解できない。彼女にとっては「聖書にあるように、女性には子供のために命を捨てる以上のことはできない」(48) からだ。子供のために捨てられない「自分自身」を意識し、それを口に出す Edna が「目覚めた」女性であることは明らかだが、皮肉なことにその「目覚め」の問題点もここで同時に示されている。つまり、彼女が捨てられるものは具体的な命やお金であるのに対して、捨てられないものは「自分自身」や「何か」という漠然としたもので、彼女にさえその正体はわかっていないのだ。

ここに示されている Edna の宣言自体が曖昧さを含んでいるように、彼女の「目覚め」そのものも曖昧であることが、作品の前半では書き込まれている。つまり、夏の島で解放された感覚が、それまで心の底に抑えられていた Edna の個人としての感情を呼び起こす過程を、読者は辿ることができるのだが、同時にその「目覚め」が果たして本物なのか、という疑問も強くなっていく。16章までの Edna は、作品のタイトルに反してよく眠る。George Arms の「エドナの目覚めは再生ではなく、別種の死と見ることもできる」¹²⁾ という評はある程度あたっている。Edna の目覚めは結局事実上の死に至るのであるし、海辺の島で彼女の感覚が解きほぐされていく一方で、その変化の問題点を作者は繰り返し強調しているようにさえ見えるのだから。

その問題点が生じる理由のひとつは、作者と Edna との距離にある。先に述べたとおり、Edna は自分の変化の過程、また自分が求めるものの正体をはっきりと認識していない。ところが、作者には Edna に代ってその内面を分析することができる。

In short, Mrs. Pontellier was beginning to realize her position in the universe as a human being, and to recognize her relations as an individual to the world within and about her. This may seem like a ponderous weight of wisdom to descend upon the soul of a young woman of twenty-eight—perhaps more wisdom than the Holy Ghost is usually pleased to vouchsafe to any woman.... But the beginning of things, of a world especially, is necessarily *vague, tangled, chaotic, and exceedingly disturbing*. (14–15) [Italics mine]

彼女は、宇宙における人間としての自分の位置、内面や外面の世界と自分がどういう関係を持っているのかを悟りはじめたのだと、作者は説明する。そのような認識が28歳の女性には重荷ではあるが、物事の始まりは必然的に曖昧で、

活の象徴である。) また、「美しいというよりも端正で、率直な表情とそれに矛盾するような微妙な目鼻立ちをした」(5) 彼女はその顔が示すように、外面と内面との「二重生活」(15) を生きていた。夢見がちで恋に恋する少女であった彼女は、結婚は夢の世界を去り、現実の世界へ入ることだと考え、それなりに満足した結婚生活を送っていたはずだった。ところが、この夏を出発点として彼女の変化が始まる。それは、何への「目覚め」であり、どんな「目覚め」なのか。一言で言えば、Barbara C. Ewell の言うように、彼女の「目覚め」の基本は「自分の肉体的存在に気づくこと」¹¹⁾ であろうが、以下では、まず、何に目覚めたのかを具体的にあげたうえで、その「目覚め」に含まれる問題点を指摘したい。

最初の変化は、夜遅く帰ってきた夫から、子供が熱を出しているのに気づいていない、子供の世話をおろそかにしている、と叱責されて、Edna が一人で泣く場面に示されている。叱責されるのは、これまでの結婚生活では珍しいことではないのに、何故今夜に限って泣きたくなるのか、彼女にはわからない。正体のわからない抑圧感が、本人にはじめて意識される時である。以下、あけすけな物言いをするクリオール社会にはじめて親しく接した時の彼女の驚き(11)、誘い掛けるような海の声(15)、典型的なクリオールの女性であるMadame Ratignolle の影響により、自分を包む慎みをゆるめはじめたこと(15)、孤独な音楽家 Mademoiselle Reisz の弾くピアノを聞いて、情熱そのものが魂の中に生じたこと(27)、その夜初めて泳げるようになったこと(28)、最初の欲望の兆し(31)、夫の要求の拒絶(32)、半分目覚めたという感じ(33)、Robert に夢中になっていることに気づく(46)、とそれまで普通の人妻であったEdna が次第に変化していく様が描かれる。それに伴い彼女の呼び方も、Mrs. Pontellier から Edna Pontellier、さらには Edna へと変わっていく。人妻という役割を持った人物から個人としての内面がより重視される人物へと変化した結果であろう。ついには、「その子供を溺愛し、夫を崇め、個人としての自分を消し、守護天使として羽根を差し伸べるのを神聖な特権」(10) と考える Madame Ratignolle をはじめとするクリオールの女性達のただ中で、Edna は、「子供達のためなら命もお金もいらないが、自分自身は捨てられない」と、役割を離れたところでの「自分自身」の大切さをはっきりと述べる。

I would give up the unessential; I would give money, I would give my life for my children; but I wouldn't give myself. I can't make it more clear; it's only something which I am beginning to comprehend, which is revealing itself to me. (48) [Italics mine]

ってきた Robert に再会し愛し合っていることを確認するが、その最中に友人 Madame Ratignolle の頼みに応じて、彼女の出産の付き添いに出掛けた間に、彼は「愛しているからさようなら」という書き置きを残して、姿を消す。翌日、一人でグランド・アイルを訪れた Edna は、海に入って泳ぎ始め次第に意識を失っていく。このように、ごく簡単に言えば、人妻の恋愛と破局の話である。実際、この作品の出版当時20代半ばであった Willa Cather は、Edna とボヴァリー夫人との類似点を指摘したうえで、両者を恋愛の過度の理想化の犠牲者と見ている⁹⁾。

しかし、Cather のように言い切ってしまうには、Edna の「目覚め」と破局にはもっと多くの問題が含まれている。この小論の目的は、その問題を探ることにある。つまり、大筋としては人妻の恋愛と破局としか言いようのない話のどこに、今日再評価されるほどの意義があるのか、ということである。特に、「目覚め」の内容と結末の解釈をめぐるのは、幾つかの見方があるので、そこを中心に考えてみたい。結論を先に言えば、筆者は結末を主人公の敗北と見ている。作品は、全39章、Norton 版で114ページの中編小説である。場面は16章までがグランド・アイル、以下38章まではニュー・オリンズ、最後の39章で再びグランド・アイルに戻る。従って、以下では、テキストに沿いつつ、Ⅱ章では、最初の16章までを中心に Edna は何に目覚めたのか、Ⅲ章では、17章以降を中心にその「目覚め」の行方を、Ⅳ章では39章を中心に作品の結末を扱う。

Ⅱ

場面は、けたたましく啼き続けるオウムの描写で始まる。時代背景は Norton 版テキストにつけられた注によれば、1893年以前らしい。オウムは「スペイン語を少しと誰にも理解されない言葉を話す」¹⁰⁾ かごの中の鳥で、Edna の滞在する宿の女主人 Madame Lebrun の「持ち物」(3)である。その声のやかましさに閉口した Mr. Pontellier は、ついに新聞を読むのをやめて、海から上がってくる妻と Robert を眺めている。日焼けした妻をとがめる時の彼の口調は、「貴重な財産がそこなわれたかのように」(4)と書かれている。海から上がった妻は、夫にとがめられて自分の手を眺めているうちに、彼に指輪を預けていたと、思いだす。

わずか2ページの導入部分だが、Edna の置かれている位置と彼女の現在の精神状態が暗示された見事な描写である。すなわち、人妻としての Edna はかごの中のオウムと同じように人の持ち物であり、しかもそのことを無意識のうちに忘れたがっているのである。(指輪とはあとの場面でわかるように結婚生

Zenobia に、恋愛に破れた末の入水自殺をさせている。また、1854年の手紙には Howe 夫人の詩集に触れて、「素晴らしい詩だが、出版するとは彼女の中に悪魔がいるに違いない。家庭の不幸の歴史を口外するようなものだ。....彼女の夫はどう思うだろうか。」⁴⁾と記していることから、彼がものを書く女性、家庭婦人という立場から逸脱した女性にあまり好意的でなかったことが窺われる。

従って、19世紀最後の年に出版された Chopin の *The Awakening* の特徴のひとつは「男女の熱情的な出会いを回避しがちな」⁵⁾ アメリカ文学において、「これまでにアメリカで書かれた女性の性的な生活についての最も重要な小説」⁶⁾と、Lazer Ziff によって後に評価される程、女性の内面が女性によって大胆に描かれている点にあると言えるだろう。実際、Edna Pontellier という人妻の恋愛、姦通、入水自殺を扱ったこの作品は、発表されるとすぐに、「不健康な本」とか「毒薬というラベルを貼っておくとよい」などと、激しく非難された⁷⁾。作者 Chopin はこの時40代後半であったが、この本を図書館から閉め出され、文学クラブから除名され、晩年は失意の内にわずかな短篇小説と詩を書いたのみで、1904年8月に53歳で脳溢血で亡くなった。しばらくは埋もれた作品であり、作家であったが、1956年に Kenneth Eble が“A Forgotten Novel”と題した批評で取り上げ、「第一級作品」⁸⁾と評した。

The Awakening と比べられることの多いフローベルの『ボヴァリー夫人』(1857)をはじめとして、19世紀後半には結婚生活を扱った多くの文学作品がヨーロッパでは発表されている。トルストイの『アンナ・カレーニナ』は1875年から78年にかけて、イプセンの『人形の家』は1879年に、モーパッサンの『女の一生』は1883年に、ハーディの『日陰者ジュード』は1895年に出版された。ヨーロッパだけでなく、日本でも雑誌『青踏』の創刊が1911年、有島武郎の『或る女』が1911年、宮本百合子の『伸子』が1928年に出版された。*The Awakening* もこのような流れの中で、現われるべくして現われた作品であったと位置づけられる。

話の粗筋は次の通りである。ケンタッキー州出身の28歳の主人公 Edna Pontellier にはクリオール（フランス系移民の子孫）の40歳の夫と二人の子供がいる。彼女は住まいのあるニュー・オリンズの近郊の避暑地グランド・アイルに、ひと夏の間、子供たちと共に滞在し様々な「目覚め」を経験するが、中でも重要なのは、2歳年下の青年 Robert Lebrun との恋愛であった。しかし、人妻との恋愛が大事になるのを恐れた Robert は互いの感情を口にする前に、突然メキシコへと旅立ってしまう。夏も終わり、ニュー・オリンズへ戻った Edna は Robert への思いを断ちきれないままに、次第に妻としての義務を怠り、有名な遊び人の Alcée Arobin と肉体的な関係にまで至る。折しも、帰

The Awakening における 「目覚め」の行方と結末

酒 井 三 千 穂

I

1890年、アメリカの国勢調査はフロンティア・ラインの消滅を報告した。アメリカ社会や文明に及ぼしたフロンティアの影響の大きさを考えると、この年1890年はアメリカ史における重要な転換点と言える。この小論で取り上げる Kate Chopin の作品 *The Awakening* の Norton 版テキストを編集した Margaret Culley は、1890年代は社会的に緊張の高まった10年間であった、と述べている。階級分化の顕在化、都市化・産業化による伝統的な考え方の変化、機械時代の到来を告げる1893年のシカゴ博覧会開催、と現代社会の発端となる現象が次々に現われた10年間でもあった¹⁾。この期間の最後の年1899年に出版された *The Awakening* は、一人の人妻 Edna Pontellier の生き方を中心に展開する中編小説である。1960年代以降特に、再評価され今日に至っている²⁾。この作品の位置づけ、特徴を明らかにするために、本題に入る前に、19世紀アメリカ文学における女性像を、簡単に見ておきたい。

19世紀の代表的な作家たち Edgar Allan Poe (1809-49), Herman Melville (1819-91), Nathaniel Hawthorne (1804-64) の作品を見る限りでは、登場する女性は典型的に描写されているか、あまり姿をみせないことが多いように思われる。Poe の短篇小説の女性はいわゆる非現実的な姿で、勿論その内面には触れられていない。Melville の代表作 *Moby-Dick, or The Whale* (1851) は、船と海という男だけの世界を舞台とし、男たちと鯨との壮絶な戦いを扱っている。代表作 *The Scarlet Letter* (1850) その他で、比較的良好に女性を登場させている Hawthorne でさえ、*The Blithedale Romance* (1852) では黒髪の Zenobia と金髪の Priscilla という対照的な異母姉妹のうち、結婚について「大人の女性には、運命はただ一度しか、チャンスを与えてくれないんです。その一度だけのチャンスを何とかして人生の大事とするべく努力していかなければならないとすれば、女性はどうして幸せになんかなれるでしょう？」³⁾ と言う